

【特集展示】浜本陣の記録

—「安田家文書」受贈記念展

I-1 兵庫御宿網屋惣兵衛淨勢立文案

寛文七年（一六六七）二月二日

乍恐申上候

一私祖父網屋新左衛門と申者、日和を見申之由被 聞召候由二而、三斎様豊前御入国被遊候刻方御船之御用を承、御上下之刻日和を、見申之由二御座候、就夫豊前一国之廻船不殘私親所へ着申之由二御座候、然処二 三斎様御参勤之時分、当浦二御船懸り被遊候刻、御揚り可被為成之由被 仰出候由二而、御船奉行衆方御内証被仰聞二付、私所ハ見苦敷御座候故、網屋新右衛門と申所私親借り候而、其段申上候へハ、即刻御あかり被為成候、其時 三斎様被為成 御意候ハ、是ハされい成と被為成 御意、誰ぞ宿仕かと御尋被為成候二付、福嶋大夫殿御宿仕候と申上候由、扶持共有之かと御尋被為成候二付、太夫殿方見米卅石宛被下候と申上候由、其時方 三斎様も見米卅石宛被遣候処二、三ヶ年之内彼新右衛門 三斎様背 御意、其以後上部浦二御塩懸り被為成、則宗圓と申所を 御宿二被為成、二三ヶ年之間ハ兵庫御見向不被為成候所、何と思召候哉、御侍衆御船頭衆御兩人、私親所へ御越被成候而御意二候間新右衛門となり二 三斎様御宿可被為成候候ハ、彼新右衛門となり二 三斎様御宿可被為成候意二候間新右衛門となり二被仰候二付、私親申上候ハ、南となりハ黒田筑前殿御宿二而御座候と申上候、此所ハ御宿二被成間敷と被仰候、北となりハ鍋嶋信濃殿御宿粘右衛門と申者二而御座候、是ハ私所方も見苦敷御座候と申上候へハ、見苦敷候共新右衛門となり二御宿可被成 御意候間、案内仕候様二と被仰候二付、則私親案内仕候由、其時御兩人方粘右衛門二被仰候ハ 三斎様御宿可被成候間罷出候而御目見へ仕候様二と御申被成候由二御座候へ共とやかくやと申御宿之御請不申上候二付御兩人被仰候ハ御宿望候而も可仕候処二、御請不申儀御不審被成候二付、其時私親申上候ハ、彼新右衛門と申者ハ大夫殿方見米卅石、寺沢志摩殿方見米拾石、大久保石見殿方銀廿枚宛取、其仕合を以兵庫百姓方へ米貳百石借シ其利米を取、当浦二而五分銀と申候て、獵人売上二而百目二五匁宛取、当津へ札を銀子二仕、拾貫目ほど出し式分利を取、其上当所南浜二而年寄ヲ仕、其時ノ

いせいにて彼新右衛門二遠慮仕候哉、御宿之御請不申かと申上候、御兩人方被仰上候ハ、新右衛門となり二御宿仕さう成者ハ無御座候と被仰上候由、三斎様被為成 御意候ハ、新右衛門となり二宿無之候ハ、近所二而もくるしかるまじきと被 仰出候由、左様二御座候ハ、豊前御入国以来御影之御奉公仕あみや惣兵衛と申もの兵庫之住人二而御座候、是ハ如何御座候と被仰上候由二付、其段

三斎様被為 聞召、惣兵衛を急度呼候へとの御意之由二而（略）

I-2 熊本藩主帰国止宿安田惣兵衛請書

天保一〇年（一八三九）二月

來子年就御帰国ニ太守様御懸日、何之御差支へ無御座難有御請奉申上候、以上 御本陣兵庫 亥二月

I-3 本陣衣笠又兵衛熊本藩主参府昼休請書

嘉永五年（一八五二）六月一〇日

細川越中守様御参勤二付、来丑二月十八日方同廿七日迄之内、不相替当所御昼休被為 仰付、難有仕合奉存候、右御日限之儀者何之御差支茂無御座、難有御受仕候、已上 嘉永五年 六月十日 衣笠又兵衛 ㊞

I-4 諸用控之留帳（御国表江戸表御屋鋪表）

元文五年（一七四〇）正月

（略）二月十八日御廻状到來越中殿当年帰国之節其表旅行二付而休泊日限之義、其表罷通候節申請置候処、様子違休泊日限左之通（略）五月十日 同十一日 同十二日 兵庫 止宿（略）右之通止宿昼休可有之候、支有無之義ハ毎々通付紙を以御申越可被下候、此段為可申達如此御座候、恐惶謹言

正月廿八日 小堀順太兵衛 書判 吉川五太夫 同

西宮 中嶋藤十郎様 兵庫 安田惣兵衛様（略）

I-5 本陣網屋惣兵衛より藩主細川重賢兵庫止宿先触到來届

明和三年（一七六六）正月一五日

一細川越中守様為御帰国、当五月十五日十七日之内御当地御止宿之段、御先触到來仕候二付、御届奉申上候、以上 御本陣 網屋惣兵衛 ㊞

I-6 浜本陣網屋惣兵衛廻文（藩主細川重賢止宿日變

更 明和三年（一七六六）五月二日

（包紙）「回章 網屋惣兵衛」

一細川越中守様為御帰国、五月十五日、十七日之内御止宿之段、先達而被仰聞候、然ル処十七日、十八日、十九日之内、当地御止宿之由、御内々申来候二付、為御知申上候、御承知被成置可被下候、以上（付箋）「明和三戌年」 戊 五月十二日 網屋 惣兵衛 ㊞

小豆屋 助右衛門様 ㊞ 繪屋 右近右衛門様 ㊞ 網屋 新九郎様 ㊞ 肥前屋 粘右衛門様 ㊞ 肥前屋 三郎右衛門様 ㊞ 網屋 佐左衛門様 ㊞

網屋 三太夫様 ㊦

壺屋 七左衛門様 ㊦

日向屋 治郎左衛門様 ㊦

I-7 細川右京大夫参府先触

万延元年(二八六〇)五月

(略)一冊差越置申候間、写留
有之候而向々御順達
被下候様頼入存候、拙者共
其駄罷通候節、委敷儀者
及御相談可申候、則宿割帳
一冊差越置申候、以上

肥後 五月 富田長作
渡邊小右衛門(略)

西条四日市 五嶋九右衛門殿 ㊦

(付紙)「太守様御参府被為 遊候二付、
当駄御止宿被為 仰付難有仕合
奉存候、然ル処十六日方廿三日迄之義者
松平大膳大夫様御止宿御掛日御先約
御座候間、右御日限之内者乍恐御差支
奉申上候、尤御明日二相成候へ者難有御請
可奉申上候、已上

I-8 御帰国御宿賦帳
五月十七日 西条駄御茶屋番
五嶋九右衛門 ㊦(略)

明和三年(二七六六)五月一七日

(略)御宿賦御役人
成田源兵衛様
神西長右衛門様
水野傳右衛門様
十七日御着
申下刻
十八日御立
辰上刻
献上

一生鯛 式枚
一樽 菊沢名酒 安田惣兵衛
一御杉重
一樽 浅沢名酒

大小たい三枚 同藤八
いせえひ五ツ
ほうほ大巻ツ
あわひ三ツ(略)

I-9 熊本藩家中下宿割張出

江戸時代後期

肥前や粘右衛門
境野丈之助
下横目(略)

I-10 浜本陣諸用手控

万延元年(二八六〇)慶応四年(二八六八)

(略)御杉重「箱の図」
(略)生鯛尺二三寸「魚の図」
(略)御杉重献立
一魚類五品ケ七品ケ
取ませ
二青物類七品取ませ
三寒さらし
こしこ
きなこ

青まめ二て(略)
I-11 浜本陣諸用手控

嘉永六年(二八五三)安政三年(二八五六)

(付箋)「嘉永六五年」
(略)当座心得置
於 右近右衛門宅
九月六日
筑前少将様御止宿
御下宿惣而四十六軒
例年五拾軒余二相成
申候得共、当年者異船之
御用二付、急二御帰国二相成候二付、
御下宿少々減シ有之候(略)

I-12 安田家浜本陣平面図

天保三年(二八三三)七月

I-13 御茶屋之図(安田家浜本陣平面図)

江戸時代後期

II-1 兵庫津各町人数惣寄

寛政八年(二七九六)一〇月

北浜

島上町

家数合八十七軒

外二屋敷地三ヶ所

人数合四百三十巻人

内男式百廿四人
女式百七人(略)

II-2 記録控(熊本藩浜本陣安田家記録控)

文政九年(二八二二)正月

II-3 七宮・和田宮争論一件綴

安永年間(二七七一-二七八二)

(略)乍恐口上

一兵庫津寺社祭礼之儀二付、去ル年十二月廿日、
名主共被召呼相糺候上、御答書差上候様被仰付候処、
当未正月十日迄御日延奉願候、依之右御答書惣兵衛義
当月廿五日迄御日延申上度候二付兩人共同様二御日延
御願奉申上度候、此段御聞濟被為 成下候様奉願候、
安永四年未正月十二日 兵庫津名主
正直屋安右衛門 印
六軒屋弥兵衛 印
網屋惣兵衛 印

御奉行所(略)
II-4 北風荘右衛門取扱品初相場表

江戸時代 正月六日

(略)初相場

斗り

一筑前米 七拾九匁(略)
右之通二御座候、猶不相替
御用向被仰付度奉願上候、以上

正月六日 北風荘右衛門

II-5 網屋新九郎取扱品初相場表

江戸時代 正月

当地初相場

斗り

一広島米 七拾九匁(略)
右之通御座候間、不相替御用向
可被下仰付候様、偏二奉希上候、以上

兵庫津 網屋新九郎

正月

II-6 浦方御制札写

寛政元年(二七八九)二月写

(略)右之条々急度可相守之、若存ながら隠し置、
外より令露頭者、其科本人可為同前者也
正徳四年十一月日 奉行

右從江戸被仰下候、堅可相守者也

甲斐

山城

右者浦方御制札写置之者也

寛政元酉年十一月写

天明三卯年五月

安田惣兵衛

II-7 婚礼留帳

明和六年（二七六九）二月

一明和六年丑六月廿五日

松井三右衛門殿方へ結納

遣候覚

結納

熨斗 一封（略）

成尾屋善右衛門

同 隠居（略）

II-8 乍恐奉願上口上書（九重郎相統につき）

享和元年（二八〇二）カ

乍恐奉願上口上書

一安田新左衛門義、病氣之処旧臘押詰病死仕候

依之右新左衛門孫新太郎、当时名前二仕、親類

網屋佐左衛門為後見當時

御用向御差支無之様、相勤申度奉存候、

猶相統人相究申候ハ、早速召連御願可奉申上

段、当二月二書附ヲ以御願奉申上候、然ル処先

惣兵衛倅政之助第九重郎与申者相統人二

相究、則召連罷出申候、右九重郎義惣兵衛与

相改申度候二付、何卒不相替

御用向被為 仰附被下度、奉願上候恐多

奉存候得共、右惣兵衛義

御通行之節御目見被為 仰附被下候様、

御執成奉願上以上

III-1 浜本陣屋根書替書信用願

安政六年（二八五九）正月

乍恐以書附奉願上口上覚

私

一所持之御茶屋御居間屋根之儀、去ル

宝曆八年寅九月奉願上、同十一月

願之通御銀五貫目拝借被為仰付、

惣銅瓦二葺替、御蔭ヲ以無滞御用

相勤来候処、追々年数も相立、惣屋根

相痛手入不仕候而者難相成、誠ニ以心配罷在候、

元来風当烈敷場所柄二御座候二付、

釘持愚敷悉釘相弛有之、最早葺替

不仕候而者、難保候様相成候処、近年度々

盜難二逢、右銅瓦式三拾枚計リ宛、五六ヶ

度も盜取レ候二付、追々心ヲ附敷敷用心

仕罷在候へ共、何分御本陣与私居宅相隔リ

御座候二付、夜中番見廻リ者仕候へ共難行届、

又々旧臘廿五日之夜、銅瓦四坪計リ盜取、

甚以迷惑難淡仕候、最早度々盜難之末二付、

是迄之通銅瓦二而取繕仕候而も其詮も

有之間敷候間、土瓦二葺替仕度奉存候（略）

安政六年

未正月

兵庫

安田惣兵衛

御留守居方

御役所

III-2 兵庫浜本陣連名并筒屋又兵衛本陣存統願

明和二年（二七六五）正月

（略）乍恐以書付奉願上候

一井筒屋又兵衛方御本陣被相止候段、

旧冬私共へ通達有之候二付、御願

奉申上候御事

一南浜御本陣之義ハ、往古方御大名様方

大坂迄御船二而御座候故、御用達候者共

座敷格候而、御船揚之節者御入

被遊候へ共、元来御船宿二而御座候、

夫故浦辺二住居仕候、其後追々

御陸路御通行被遊候二付、自然と

御本陣相勤来申候、尤往古方

由緒御座候而、御船宿仕義二御座候、

右之次第二付、御本陣普請仕候節者、

御銀子被下置御合力等御座候而、

普請仕候義二御座候、且又御米

支配又者御領分中商船之宿

等仕候（略）

一毎年御往来之節、御下宿并

通し人足宿近來甚差支

候而、御本陣共毎々難義至極仕候、

然者并筒屋又兵衛方御本陣

被相止候而者、御大名様方御込合之

節、脇本陣無御座候而者、甚御

指支二可相成哉と、私共難義

至極歎歎、乍恐奉存候御事

一南浜御本陣家数候而茂、御

大名様御一頭御泊被遊候得者、

皆々御下宿二成申候ゆへ、御大

名様方御相宿不相成様乍恐

奉存候、尤御下宿少々二而相

濟候御大名様、御二頭様計ハ

御相宿も可相成哉と奉存候、唯今

迄者、御込合之節者、又兵衛宅

借受候而、相勤来申候御事

一近來ハ御大名様方御二男様、

御姫様方、御家中分二而、御

通行被遊候節者、御先触無御座

候而、前日漸当日方半日前、御

宿割御出候事御座候、左様之

節、先達而御泊御座候へ者、西宮江ハ

五里、明石へも五里ツ、御座候故、御

泊之駄俄二御振替出来不申、

一向差問与乍恐奉存候

御事

一毎年長崎御奉行様又者

公儀御役人様方御泊之節、浜

御本陣二相成候而者、一向御相宿

成不申候二付、其節御通之

御大名様方、御差問与奉存候

御事（略）

III-3 大須賀藤太書状

江戸時代中期 二月八日

態々一筆致啓上候、其

後者御遠々敷罷過候、

御揃御堅固珍重二存候、

拙者義無事二而就主

用大坂二罷有候、

細川公二相勤候節者

御心尽御世話二も罷成

忝存候、右之御知人

故二此度其元へ御頼申度

儀有之候付、態々飛脚

申進候、別紙御披見、

御勝手二も相成候義二候ハ、

御承知御世話被下候様二

頼入存候、罷越し可得

御意候得共、先以書中

申進候、何とぞ此飛

脚着之上、近日二御

父子之内御出被下候様ニ

頼入候、若御用事御取

込御越シ難被成候ハ、拙者
罷越し可得御意候、右申
進度如此御座候、恐惶
謹言

(付箋)「宝曆十三年」大須賀藤太

歡治(花押)

二月八日

網屋

惣兵衛様

忠輔様

用事

III-4 安田惣兵衛一四九番嘉兵衛船入津注進状

江戸時代一〇月五日

覚

一御米九百六拾石

必右高瀬御蔵積

権力九次

住悦丸

嘉兵衛船

百四拾九番

右御米今日致着船候、

天氣次第追々為差登

可申候、此段御注進如斯二

御座候以上

十月五日 安田惣兵衛

塩飽屋清右衛門様

慶応元年(一八六五)一二月改正

(略)先後定規之事

和田岬御番所前方橋舟二而

上り、送状持参可致事、夫方

下方上り来候ハ、先舟たり共

番下申付候事、無番之舟二

候共、送状届候而先後附置可申事

定法也、和田岬御番所前へ来り

候節、沖之方地之方与相重り候時ハ、

地之方二居候舟先二候事

但往古法ハ、兵庫港へ入津仕碇ヲ下し

繫船致置候上送り状届出候規定二候所、

中古方段々不法之仕方在之候付而、船方一統

申合せ、右様和田岬御番所前を以先後場

相定候事、然ル所、当時ハ御台場在之

候二付、大半和田岬内へ廻り候上、橋舟を以

先後附上り来候様相成居申候事(略)

III-6 沖船頭久右衛門難船置証文・兵庫津船役人八右衛門
門浦手形写

宝曆三年(一七六三)九月

口上書

一細川越中守様御領分肥州玉名郡高瀬町木村

久兵衛、同御領分御国益城郡熊本町中尾安左衛門、中間

船式拾三端帆、沖船頭久右衛門水主共合拾五人乗、羽州

秋田湊二而、秋田御米九百五拾石積之、当六月二日

同所出船(略)

処、当月三日夜ハツ時方南風強吹候二付、橋船二而碇

差入置戻り本船へ乗移候砌、水主之内磯八踏逃し、

海中江落申候二付、早速船頭水主綱杯移掛、

相助可申と色々相働候得共、浪に卷れ何方江流

行候哉不相知、風波次第二荒く、橋船危相成候二付、

無是非乗移戻り、本船へ乗移候処、本船地方へ引ケ

候間、船中二残有之候碇不残差入相凌候へ共、風波

荒く、御当津東出町浜江被打破破船仕候二付、船

宿網屋惣兵衛方へ相断候処、御当浦御役人中江惣

兵衛方御届被下候二付、早速浦御役人中人大勢

召連御出、破船流散品々御取揚置被下(略)

III-7 細川三斎書状

江戸時代初期 正月晦日

已上

為改年之御祝儀

御飛札、殊御祈禱之

御札被持越、目出度

令頂戴候、次二油煙

拾挺給、満足仕候、

尚上洛之節可申

述候、恐々謹言

三斎

正月晦日 宗立(花押)

東大寺

年預五師

御返報

III-8 細川三斎書状

江戸時代初期 三月五日

已上

罷上二付、早々

年預五師被差

上諸白大樽三ツ、

被懸御意候、度々之

儀御礼難申

尽候、委細五師へ
申入候、恐々謹言

三斎

三月五日

東大寺

年預五師

進覽

III-9 長岡河内守書状

江戸時代初期 四月二日

此者有間へ湯を

くみ二三斎方被遣候、

有間へ之道無案

内二候間、能々をしへ

られ候て可有、為其

令申候、猶此者二申候、

恐々謹言

長岡河内守

卯月十一日

あみや

惣兵衛殿

参

III-10 町引之絵図

元文五年(一七四〇)五月、明和三年(一七六六)五月再改

III-11 熊本藩より役米贈与沙汰書

明治三年(一八七〇)一二月二七日

安田惣兵衛

改革二付從來廻米

之内より受取来候

肩米向後被差止、

更二八木百俵定

毎歳被差贈之

III-12 安田家系譜

昭和十七年(一九四二)一〇月

III-13 安田店持地面絵図

明治二年(一八六九)九月

【主な参考文献】中公版『浜本陣の研究』(落北書房、一九五六年)・

『神戸市文獻史料』四・五(神戸市教育委員会、一九八二年・一九八三年)

翻刻には句読点を加え、漢字は人名等を除いて通符の字体に改めました。

「安田家文書」について、高久寛弘氏(関西大学文学部教授・河野未央氏

(武庫川女子大学文学部准教授)より、多くのご教示を賜りました。深く

感謝申し上げます。